

## 実務表現「の」と「と」

2008.04.09(水)第3限 教場四—三〇二

## 01の講義内容

※最初に情報センターの使用手続について担当責任者説明  
書く技術 原稿用紙縦書きの意味

日本語の文字ひらがな…「の」と「と」

石川九楊著『書字ノススメ』(新潮文庫より)

タイトルというのは、書き手にとつても、編集者にとつても、頭を悩ます難問だ。

近年の軽い本はともかく、本の題名で圧倒的に多いのが、『風土』『共同幻想論』というように漢字だけで成立するもの。また仮名交じりとなると、九鬼周造の名著『いき』の構造』のように、書棚を見わたすと「の」のつく題名の書物が多い。次いで多いのが「と」。評論家・埴谷雄高の著書には、『鞭と独楽』『毘と拍車』など、たいていに「と」がつく。政治学者・丸山真男の『現代政治の思想と行動』のように、「の」と「と」の組み合わせもけっこう多い。朝鮮人の姓は「朴さん」「李さん」「金さん」が多くて、まぎらわしくないのだろうかと思うが、外国人には、日本の書物の「の」と「と」の文字が目について仕方ないのではなからうか。

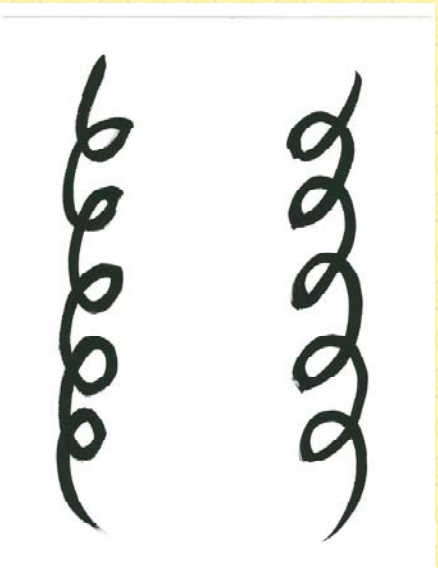
この事実から見る限り、日本語では、助詞「の」もしくは「と」で二つの名詞を関係づけることによって、最小限の宇宙を表現できるようだ。だとすれば、「の」と「と」は、他とは較(くら)べものにならぬほど重要な助詞であり、これらの中に日本語を解く鍵(かぎ)が隠されているはずだ。

ところで、毛筆で仮名文字を勉強する場合、まず右回転、左回転の運筆を練習する。はじめのうちは、筆をおしつけて、ぎこちない筆あとの円を連ねるだけ。やがて、右回転では、右上から左下へ進む時に力を加え、左回転では、左上から右下へ進む時に力を加えることを覚えると、筆先がきれいに回り、速く、滑らかに書けるようになる。この右回転から生まれるのが、「ののの…」であり、左回転から生まれるのが「ととと…」である。言語学的分析からの「の」と「と」が対をなす関係にあることが導き出せるかどうか知らないが、書学的には、「の」と「と」が対をなす助詞であることに気づかされる。

いうまでもなく、「の」は漢字の「乃」から、「と」は「止」から生まれた。「乃」と「止」の原形からいえば、もつと違った仮名文字の姿になってもよかった。事実、中国のくずし字(草書)の「止」は、左側の縦画から始まり、「心」の第一画を消し去ったような姿に書く。中国式筆順は日本語の「と」には似合わなかったものと見えて、「止」の日本流は中央縦画から書く。

現在の言語学者やデザイナーは、文字を言葉の記号図形とでも考えているようだが、文字は決して記号図系ではない。意味を含んだ書字の力や深度や速度、角度(筆蝕が統合されて字画となり、その字画が筆順によって組み立てられて、文字と文つまり言葉成形成する。そのため、文字の形と呼ばれているものの中には、印刷文字ではとうていすくいきれない微細な意味が、その書きぶりである筆蝕としてぎっしり詰まっている。

さて、回転部が書き出しの起筆部を包み込み、右下から左下への進行時に力を加え、内側へ巻き込んでいく右回りの「の」は、包み込むように接続する意味をのせている。書字から見れば『いき』の構造』とは、「いき」——その「いき」が「構造」に巻き込まれるように接続する関係の意味している。風呂敷(ふしき)に包まれるように関係するのだ。その包みをどんどん重ねていけば、若山牧水の「かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆう



ふぐれ」のような風呂敷歌が生まれる。余談だが、風呂敷助詞「の」の好きな日本人はまた無類の包装好きでもある。

つながりのないような名詞でも、「の」はやすやすとつないでくれる。それどころか「の」代用「さえする。女性の手紙の、「のしこ」と見まがうばかりの「かしこ」は、「の」と「か」の深い関係を明らかにしているようにも見える。また、第一筆起筆部を突き出し、左上から右下への進行時に力を込められる左回りの「と」は、外部へはじき出す意味をこめている。「の」のように率直に連続する筆触ではなく、へたをすると、右上方へはねとばされて、途切れがちになりかねない。『鞭と独楽』という書名は「鞭」から「独楽」がはじけた状態を意味する。喩（たと）えれば、「鞭」という風呂敷を開けてみたら「独楽」が出て来たというあんばいだ。その結果、「鞭」と「独楽」とは、並立、対立した姿で、われわれの前に立ち現れてくる。

「の」——それは発展的、開展的ではあるが、また同一化が避けられない同化助詞である。「と」——それは同化できないものの排除の意味合いを含んでいる。へたに使うと、村八分助詞になりかねない。

本の題名から見る限り、日本語では同化と排除が関係を律する根本的な原理といえそう。現在の与党は「の」によって集まったのであり、共産党は「と」によって最初から排除されている。味方か敵か、地元か他所（よそ）か、日本人か外国人かを、まず明らかにしないではおられぬ原理が日本語の根底に横たわっている。

日本語とは、「の」である。あるいは「の」と「と」である。しかし「の」と「と」の複雑な中間項の不在が大問題なのである。

「タイトルというのは、書き手にとつても、編集者にとつても、頭を悩ます難問だ。」と云う書き出しで始まる「の」と「と」題する一文を上記に示し読んでみた。書物の題名には、この「の」と「と」が多いという。この著者石川九楊さんの書物の題名も『書と文字は面白い』『書字ノススメ』と「の」と「と」である。実際、『日本の書物』『日本の名筆』『オタミ・ベンベの言語学』にはじまり、マンガの『火の鳥』と「の」で繋いでいる。また、「これから出る本」〔2007.04下期号〕の題名『自我と生命』『地獄と極楽』『生死と仏教』『死と弔い』『憲法と議会制度』『憲法と地方自治』『国民道徳とジェンダー』『司法権と憲法訴訟』……と云った具合である。

『美のゆくえ』『菩薩の願い』『起源の日本史』『近代日本の日用品小売市場』『清代中国の地球支配』『歴史の旅』『地図出版の四百年』『近代日本地方自治の歩み』『刑事訴訟の目的』『現代の国際安全保障』『政治防衛論の基礎』『地球時代の憲法』……とある。

混用型の『ヒトの機械のあいだ』『声と顔の中世史』『高野山の歴史と秘宝』『ロシアの連邦制と民族問題』『アジア太平洋諸国の収用と補償』……とある。

同じように、目先を変えて二〇〇八年度は、最近の受賞作品でも見ておこう。『「反戦」のメディア史』『第一回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会受賞』『牧畜—重経済の人類学』『第十一回「国際開発研究 大来<sup>おおきた</sup>受賞』』『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』『第十八回カナダ首相出版受賞』『「近代家族」とボデイ・ポリテイクス』『第二十二回女性史青山なを賞特別受賞』『ベンヤミンの迷宮都市』『橋本峰雄賞受賞』と枚挙をいとわない盛況ぶりである。

慥かに日本における書物の題名には「の」と「と」が多いことに改めて気づかされていく。

英語のアルファベットは文字数は少ないがその単語構成は実に複雑である。漢字は扁旁冠脚を巧に操ることでそれぞれの意味を伝える働きを有しているため、視覚イメージで意味を捉えていくことが可能な文字でもある。これを横に表示してみても読む上ではさほど問題はなからう。

例えば、江戸時代に発刊された『小野篁哥字盡』『語彙型往来』には、

椿榎楸柀 「木に春はつばき、木に夏は多のき、木に秋はひさぎ、木に冬はひるらぎ」とする。また、この原理に従って魚扁を造字すると、

鱒鰻鯪鯨 「魚に春はさはら、魚に夏はふぐ、魚に秋はさんま、魚に冬はこのしろ」

